



伝統のボラ漁継承

—漁師のふるさと愛—

松村 政揮

聞き手・開田美穂 加治谷梓（石川県立穴水高等学校1年）

自己紹介

名前は松村^{まさき}政揮。生年月日は、昭和22年11月1日、男です。家族構成は、私とお母さん、娘と孫の4人です。

ボラ漁とはどんな漁なのか

ボラ漁というのは、櫓の上からボラが来るのを待ってボラが網の中に入ったのを確認して、網の口を縛ってから網を引き上げてボラを一網打尽にする、そういう漁や。

ボラ漁が盛んな時期は4月と秋。4月から梅雨の頃は小ぶりで味は落ちるけど大きな群れになってボラがたくさんやってくる。秋は、4月ほどの群れではないが、大きなボラがやってくる。

ボラは回遊魚やから、その日によって回遊してくるボラの数はぜんぜん違う。数匹のときもあれば、数百匹のとき

もある。ナドキच्छゅうて、魚が動く時間があるから、「そろそろナドキやから櫓上がるよ」っていうて、その頃になったら櫓に上がってじっと待っとらんなん。櫓はボラがちょうど回ってるところに作っとくげん。船で櫓まで行って櫓の上でじっとボラが来るのを待つ。ボラは敏感な魚やから、上から見とって水面に影が映るとすぐに逃げていってしまう。だから静かに待っとらんなん。群れでボラがやってくるのを見ると感動を感じるよ。

ボラ漁そのものはひとりでも出来るけど、起こす過程で沢山の人がおらんと。一応私らは9人で中居七浦七入会च्छゅうグループ作って、今のボラ待ち櫓をやっとれんわ。

あと、櫓組むがは女性だけじゃちょっと無理やし男もおらんと駄目やけど、櫓を建ててしまえば女の人も漁は出来る。昔、内浦で仲間と一緒に行ってボラ待ち櫓を造ってあげてんけど、そこに婆ちゃんが上がって漁しとったよ。補助はいるけど、女性でもできるよ。

昔ながらの櫓と松村さんの思い

今は、網は業者に頼んで機械で編んでもらう。櫓円形で深さが13メートルほど。しかし、櫓自体は今でも自分らで作るよ。深さを測って、重りを付けた櫓を海に入れる。レッカーがついた船で入れるか、人力で入れるか、どちらかやな。

櫓はあちからもこちからも支えあうような形で建ててあれんわ。東京ドームとか、あんなんなら空気入れて天井膨らましとるげんけど、鉄骨ドームいうて何百トンっていうでっかい鉄骨上げらんも、四方八方から支えて上にでっかい鉄骨を支えとる。だから下は全く柱が無い。ボラ待ち櫓も、そういう形式でやとる。櫓は15、6人おらんと組み立てるのは難しいな。あと、漁をする人が海の上に浮いとるような感じになるようにすると、網がひっかからんで漁がしやすい。

櫓を作るがは、伝統的なものやから昔のやり方に則ってやりたいな、と思とる。機械使えば、楽は楽やけどやっぱり将来若い人に、こうゆう建て方があるんやなっちゆう事を知ってもらいたいから。例えばロープひとつ加えるのも、今なら針金入れて番線で縛れば簡単な事やけど、それじゃあ意味無いから、やっぱりロープで1本で。全然問題ないし、長持ちするよ。針金や釘は1本も使わん。

ボラ漁の現在の状況

昔獲れた量に比べたら、今は3分の1もないわ。原因は、漁師が少なくなったことと、ボラ漁の待ち時間が長く、時短重視の現代にマッチした漁法ではないから、ということがあるわ。

昔、団体のボラ待ち漁をやっている人なんかは、丘の上に小屋を建てて待機して、何時間かで交代してやとったわ。ボラ漁だけではやってっつかれんから、みんな他の漁もしとるよ。

ボラという魚について

夏場は時期じゃないから売ってないけど、秋になったらスーパーにも売とるよ。目が赤いやつはボラ特有のニオイがするし、目が白いのニオイせんわ。

穴水のほかでも、佐賀県や熊本県ではボラの卵巣をとってカラスミにするみたいよ。カラスミは日本の三大珍味でうまいよ。明太子のサイズで4000円から5000円ぐらいするわ。この辺やと、スギヨさんか、金沢の近江町市場へ行けば売とるよ。

ボラは生簀で育てたこともあるけど、20日しかもたんかつ

たわ。どんどんヒレがなくなっていったわ。稚魚（卵から孵化させたもの）から育てればどうか分らんけど。ボラ自身は、わりと雑食で小魚から藻みたいなものまで食べとるね。

ボラを食べる文化

ボラを食べるのは穴水の文化で、七尾や金沢でも獲れるけれど、あんまり食べんわ。刺身にしてもおいしいし、茶漬けにするとすごくうまいよ。焼くよりも生で食べるとサッパリしておいしい。刺身にするとき、生姜をすりおろして醤油につけて食べるのが伝統的な食べ方やわ。みんな、そういう食べ方をしてほしいね。

中島とか穴水以外でボラの刺身を食べるときは、氷水に刺身をつけて揉み洗いして絞って食べると穴水で食べるのと似た味で食べることができる。「ボラのあらい」っていうげん。

なぜボラ漁を始めたか

何故って言われれば難しい話やけど、ボラ待ち櫓が昔はこの中居地区に何十機とあったのが、ここ近年ずーっと漁師さんがおらんくなって。そしてだんだん年寄りになってくわけ。それに気付いたのがボラ漁を始めたきっかけ。途絶えていくのはいかんな、と思つて、俺と遠藤さんとで「地域の活性化のためにやるか」と言うて始めた。後々若い人達に、こうゆうもんがあったちゆう事を残しておきたかったつてん。体力が続く限り、ボラ漁の仕事は続けたいね。

漁ではそんな大変な事はないけど、ボラ待ち櫓を作る際に、丸太そのものが長いし太くて重たいから、やっぱり今後も若い人の力がボラ漁にはどうしても必要やと思わ。

小さい頃から馴染み深かった櫓

誰が最初にボラ待ち櫓を作ったかはわからんけれども、父親が櫓を建てるのを見てかって、作り方は知っていた。そのぐらい櫓は地域に馴染み深いもんやった。

小さいときはひと夏に2回皮が剥けるぐらい日焼けした。それだけ海に入ってたつてことやね。元気の秘訣は海に入ること。子どもは泳いでいって櫓を見に行ったもんや。「静かにしとれ！」と怒られながらも、漁師と子どもの交流があった。

ボラ漁をやるときの心構え

何にでも言えることやけど、自分で信念を持ってやらんと。自分がやろうと思つたら集中してやらんといかん。その



ボラ待ち檣の上部

ほうが、余計に何でも出来ると思うよ。今はボラ、今はカキ、というふうに時期ごとに仕分けして集中してやるとるよ。ただ、それはそれで、人にやってってくれて言われたら、それもやらなんけどね。でも、自分の信念は大切にせんと。

ボラ漁の継承活動と熱心な若者

先日は、星稜大学池田ゼミの生徒と秋の漁に入るための準備をした。網の修繕のやり方とか、教えるんやけど、生徒は熱心やわ。金沢大学の学生も何人かこっちへ来て手伝いしているよ。自分で畑を作ったり山菜を採ったりして、自給自足の生活をしたいっていう子はたくさんおる。日本大学、星稜大学、金沢工業大学とかたくさんの大学の学生が関心持つとる。穴水の魚の生態を調べている学生もいる。大学のサークルやサイトでそういう仲間の輪が広がるとるみたいやね。

ボラ漁の漁師になりたいければ、穴水町に住んで漁業権をとれば誰でもなれるけど、檣を組んだりする知識がいるね。魚が好きかどうか肝心やと思うわ。

ボラ待ちを観光の目玉として都会の子どもらに体験させてあげれば、ボラ待ちをやってみたいという気持ちになる子どもおるかもしれんし、そういうことが増えれば穴水も活性化

するし、子どもらにも勇気を与えられると思う。

10月1日に、役場の企画観光課が能越テレビ（能越ケーブルネット）の15分から20分の番組を作りたいて言うてきてん。星稜の池田先生も10月中ごろにMRO（北陸放送）のボラを獲るところの番組を作りたいらしい。この辺の若い人は乗り気でないけど、遠方から来てボラ漁をやりたいという人もおるから、そんな人たちにどんどん教えていきたい。若い人が後を継いでやってくれたら一番いい。先日も静岡からそういう人來たし、意気込みのある人もおるわ。

充実した人生とは

わしらは、中学校終わったなりから親元を離れて単身仕事に行ったもんや。18歳ぐらいの頃には、大人の中に混じって一丁前に働いとった。名古屋まで汽車に揺られて行ったんや。東京、大阪、広島へも仕事に行ったよ。でも、結局行き着くところは自分のふるさとなんやわ。

都会は1年に1回か2回行けばいいところだよ。隣近所うるさくても、なじみの人ばかりやし、ボラ待ちやとれば、地域で応援してくれるし、そういうことを考えれば、田舎で地道に生きとるほうが、人生充実すると思う。他のとこへ出

て、ある程度吸収してふるさとに帰ってくる、っていうのがいいね。他の土地へ行ってみると人間は進歩せん。都会は怖いと思っても、自分が油断せんとかは大丈夫や。

どんな仕事に就くかはみんな自由だけれど、みんなが都会へ出て行ったら、その地域は発展していかんし、地元に残って農業や漁業で地道に働いとる人がおるからこそ、都会で働く人もご飯を食べることができる。そのおかげで日本は成り立っている。仕事なんてやろうと思ったらどんな仕事だってある。いかに地道に生活していくかが人生。田舎も悪くないと思うよ。漁師やりながら地域に貢献したり、地元の人と一緒に子育てに励むこともひとつの生き方だよ。

高校生へのメッセージ

今の子どもってあんまり家の手伝いせんやろ。机上の勉強も大事やけど、箒で家の掃除するとか、お母さんやおばあちゃんが洗濯しとったら、洗濯物を取り込んでたたむとか、そういうことをしていかなと、世の中出てからうまいこといかん。自分の頭を使って働いて勉強するっていうことが大事や。何かあると、すぐにコンビニに走るやろ。便利なものに頼りすぎとったらいかん。

あと、先輩・先生・親など、目上の人もしっかり自分の中で区別せんなん。みんな友達みたいに接してしまっけじめがないのはよくないわ。何かあったときに先輩をたてるとか、言葉遣いは気をつけんと。

[取材日：2013年8月6日・9月19日]

PROFILE

松村 政揮 まつむら まさき
昭和22年11月1日生・66歳・漁師

若い頃は日本各地に働きに出ているが、途絶えそうだった地元の伝統を受け継ぎ、ふるさと活性化のために仲間とボラ漁を始めた。星稜大学等大学生を始めとする若者たちに槽を用いた伝統的な漁を伝える活動に精力的に取り組む。穴水町在住。



● 取材を終えての感想 ●

今回は、貴重な体験ができて、とても嬉しく思っています。一緒に活動していた加治谷さんや先生に迷惑をかけたこともたくさんあったけれど、自分なりに一所懸命取り組めたので満足感を得られました。

松村さんからボラ漁のお話を聞いて、伝統的な漁のやり方自体は勿論、それが現代の若い人に引き継がれていることを知り、とても興味深かったです。松村さんの人生や生き方、考え方もお聞きして、自分のこれからの生き方についても考えることができました。まだ、どう生きるのかは分からないけれど、今回学んだことを活かして、何らかの形で地元で貢献できる人間になりたいと思いました。

共存の森ネットワークのみなさん、松村さん、松村さんの奥さん、加治谷さん、先生、貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。
(開田美穂 写真：右)

私は、今回初めて「聞き書き」の体験ができてとてもよかったです。最初は、自分たちだけでせねばならないかと不安でしたが、共存の森ネットワークの方々が研修会で親切にわかりやすく教えて下さったので安心して取り組むことができました。

今回、ボラ漁の話をして下さった松村さんにも感謝しています。ボラ待ち槽は、簡単にできると思い込んでいたけれど、建てるのにはたくさんの人が必要で、簡単には建てられないということ、しかし建ててしまえば、女の人でも漁をできるということが分かりました。また、伝統のボラ漁に熱心な若者がいて、それを引き継いでいることを知り、とても嬉しかったです。これからも絶やすことなく、漁が引き継がれていくといいな、と思いました。

松村さんは、最近の若い人に向けて「自分で動いて学ぶ」ことについてお話されていました。自分を振り返ってみると、あてはまったので、これからは、家の手伝いなど、自分でできるといったことは率先してやるようにしようと思いました。また、目上の人には目上の人への対応の仕方があるというお話も聞いて、自分の普段の言葉遣いの悪さを反省しました。しっかり言葉を使い分けられる大人になりたいです。

今回の「聞き書き」研修に関わって下さった皆さん、本当にありがとうございました。

(加治谷梓 写真：左)